

⑨ 直江・久木・出東・荘原

＜特徴的なテーマ＞

直江：『木綿で栄えた斐川の中心地』江戸の中頃(寛政～文化年間)一式飾りの原点も木綿の間屋だった江角屋善助。慰霊塔も斐川全体の物がある。水運もあり、商業が発展。

『直き入江』都牟自神社くらいまでが入江で、仏経山の下まで、水草がはえているような場所であった。本に記載あり。

久木：『信仰が篤い地区』洪水が起きないように祈願、豊作祈願、病気が発生しないよう(江戸時代にコレラが流行)祈願している。

『最近まで講が残っていた』平成24年(2012)頃までは美保関講、弘法大師講、金比羅講、大社講、一畑講、大山講など

『築地松が多い地区』

『宍道湖の汀線と久木の歴史』1200年頃の汀線、1600年頃の汀線、萬蔵寺川(運河だった)で松江に米を運んだ。豪農屋敷と川がセットで、米が集まっていた(伝承館の江角家、原鹿豪農屋敷の江角家も元は川沿い)

その他：メタンガス、荒神さん、覚専寺のシイの大木

出東：『川の氾濫と変遷の歴史』取水を巡って「水番」や「水げんか」などの言葉も残る。川跡と思われる高まりや、築地松も残る。また、川や橋がたくさんある。

荘原：代表する遺跡は『荒神谷遺跡』

荒神谷を取り巻く社寺(神代神社、波迦神社、永徳寺など)

『交通の要衝 荘原』西方面へのメインルートで、旧山陰道(江戸時代)が通る。水運における宍道湖西側の入口、玄関。汽船町があり、昔は商人の町として栄えた。現在は出雲空港が立地。一里塚も交通を象徴する文化財。観音寺のお祭り「弘法さん」は荘原全体の祭り。

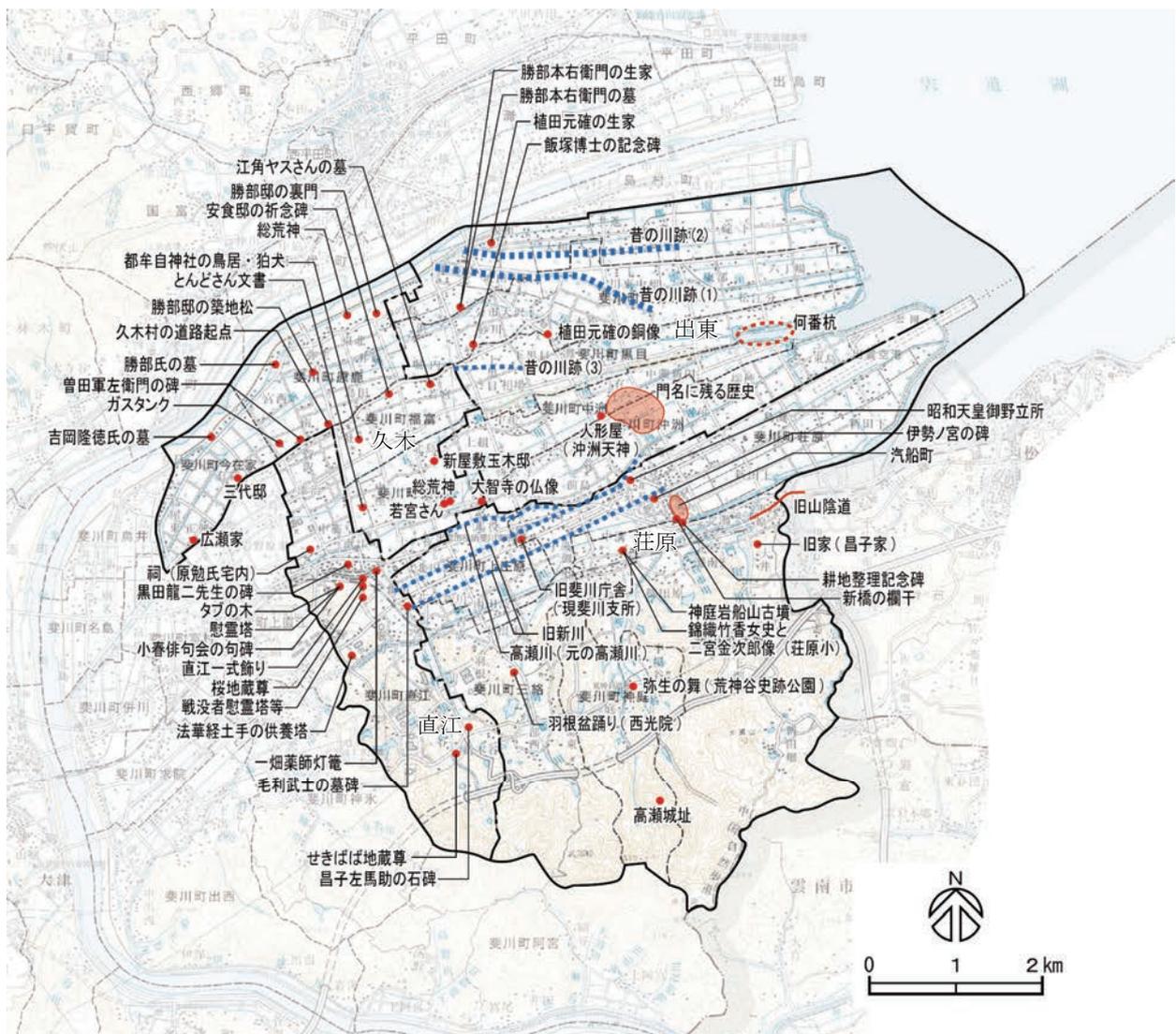


図 1-21 文化財(歴史文化：主として未指定等)とその分布～直江・久木・出東・荘原～

⑩ 出西・阿宮・伊波野

＜特徴的なテーマ＞

出西：『斐川の水源地のまち』出西岩樋や斐川宍道水道の出西水源地があるなど、水の起点。斐伊川の東西で水源が異なり、水の確保上良い場所であることから、昔は農業、今は村田製作所や富士通が立地する。一方で、大雨などでの水害といった側面もある。

『水路と陸路による交通の要衝』

『農産物と食文化』霧が発生することで農産物に良い影響を与える。出西生姜を始め、葉たばこやぶどうが栽培される。久武神社は、生姜にまつわる伝説が2つあり、秋の収穫祭なども行われる。

阿宮：『継承される無形文化財』阿宮神楽、上阿宮と下阿宮の獅子舞(阿吾神社の大例祭。子ども御輿も出る)、盆踊り(年1回コミセンで行う。「山崩し」という唄があり、阿宮で作詞と振り付けがなされた)

『川の恵み』砂鉄を取って生計を立てている人がいた。昭和30年(1955)頃までやっていたようで、舟が残っている(和鋼博物館にある)。砂鉄取りのための舟で、阿宮で作ったもの。上阿宮の方で何軒かあった。

川の洪水で砂がたまる→家は山の中腹にあった→土手がきちんと出来た→家が川の側まで戻る

『龍王山(神八さん)』土手に残り、斐伊川の氾濫を治めるため。石と榊を祀る。

斐伊川と密接に関わった地域。保科家(貴族院議員)旧家があった。山林に係わる生業(木炭、林業)斐伊川は運搬のために使う。

『阿宮は仏経山と斐伊川の間の地域』山と川は出雲にとって重要な文化遺産。

伊波野：『古くから川を中心に発展した町』今も地図には筋状に家が並び、航空写真でも築地が並ぶ様子が見て取れる。古い家が並ぶのは自然堤防の上であり、その周りの低いところは豊かな田畑が広がっていた。

『岩野山を中心とした歴史』現在の岩野薬師のある場所は小高い丘になっていて山へとつながっている。ここには、古い寺社が集まり、信仰の中心になっていた。また、戦国時代には砦も築かれた。

『高瀬川の歴史』出西岩樋から引かれた高瀬川が通る。ここには高瀬舟が通り、直江の町に向けて流通の中心であった。

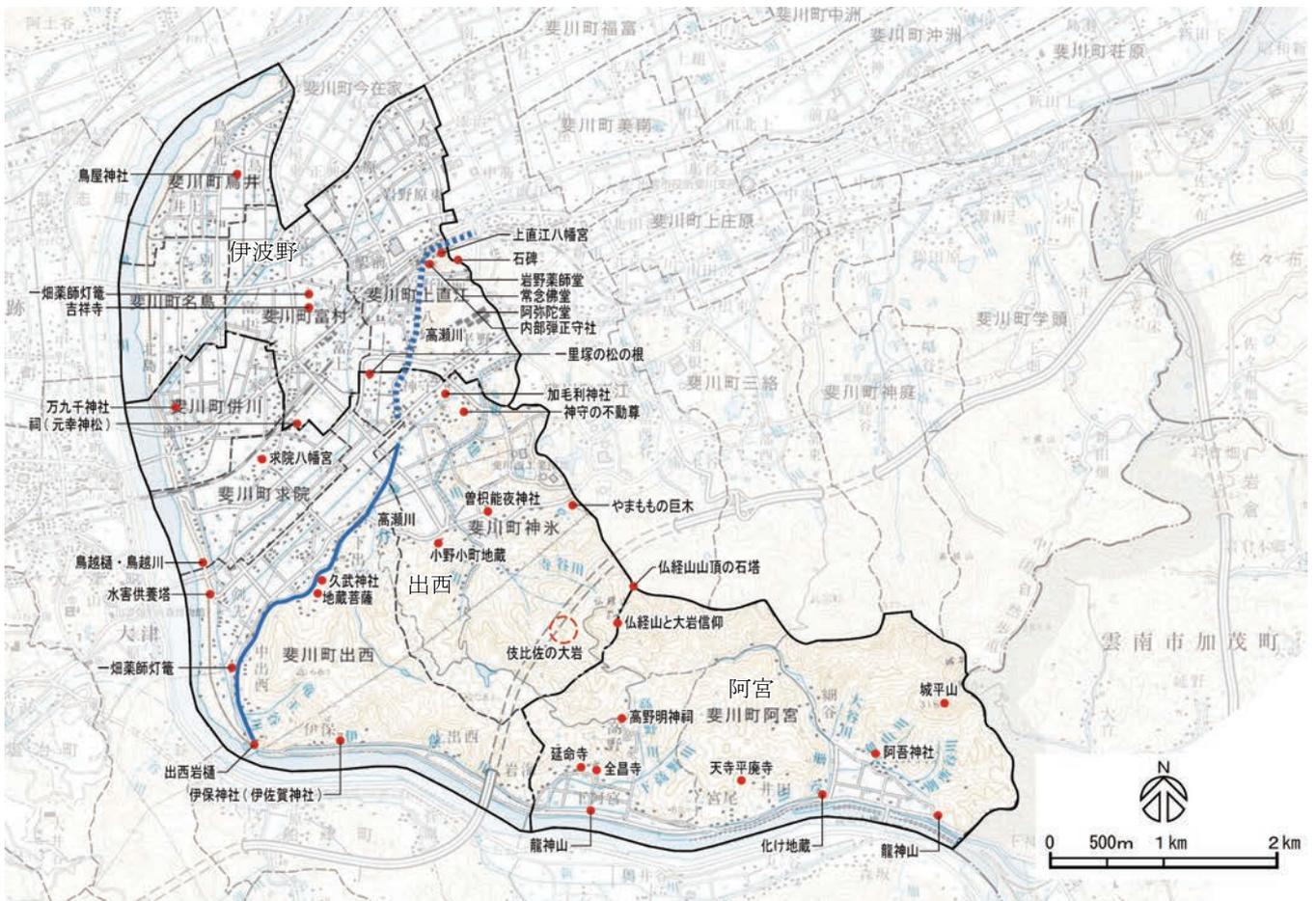


図 1-22 文化財(歴史文化：主として未指定等)とその分布～出西・阿宮・伊波野～



⑫ 日御碕・鵜鷺

＜特徴的なテーマ＞

日御碕：『神代の時代から栄えてきた町』とても古くから栄えた地区で、よそに頼らずとも独立した一つの国みたいなもの。また、日御碕神社があつてこそこの地区。

灯台は海運としての要所であり、北前船は宇龍港(西の横綱で、船の出入りを管理、米倉があつた)を中心とした交流があつた。戦国大名が利権を狙い、江戸時代には天領となる。

日御碕神社への旧道は將軍の代わりに松江藩が参拝した。

鵜鷺：『北前船で栄えた町』 『銅山をはじめとする鉱山で栄えた町』

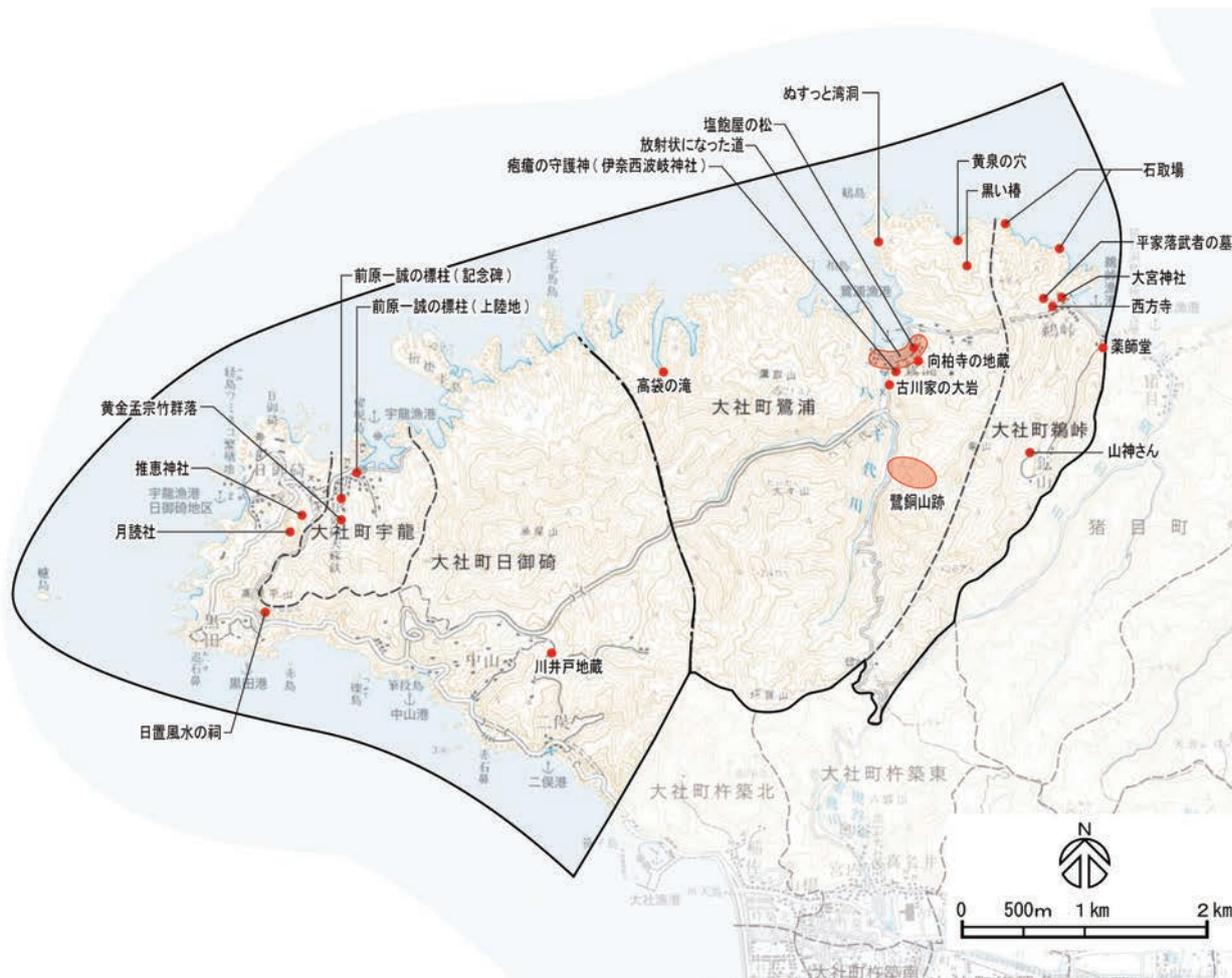


図1-24 文化財(歴史文化：主として未指定等)とその分布～日御碕・鵜鷺～

## イ 聞き取り調査から見出された主なテーマ

## ①【斐伊川下流の開拓と築地松】《灘分・久木・出東・荘原》

近世以降、斐伊川下流部の地域では、治水を行いながら農地を開拓してきた歴史が共通して認められます。

これらの地域では「川違え」による開拓が進められたことにより、東西方向へ水路が設置されました。農家はこの水路を米の運搬に利用するため屋敷を水路沿いに築き、その屋敷を取り囲む土墨に植栽した松を、次第に競ってきれいに刈り込むようになります。こうして整美な築地松を構える屋敷が東西方向に点在する、独特の景観が生まれました。

## ②【神西湖周辺の農地開拓】《神西・湖陵》

神西と湖陵はともに、神西湖周辺の湿地を農地として開拓した歴史があります。貞享3年(1686)に排水のための<sup>さしみがわ</sup>差海川が開削されて以降、農地が広がりました。

## ③【農地開拓者たち】《長浜・高松・荒木・遙堪》

かつて西流していた斐伊川が完全に東へと流れを変えると、神門水海<sup>ひしれいけ</sup>や菱根池の周辺で開拓が進められます。

各地域で開拓に貢献した偉人達には、長浜で西園開拓を行った秦喜兵衛(生没年不詳)、遙堪で菱根池跡の新田開拓を行った三木与兵衛(1595-1643)、荒木で八通山<sup>やとおりさん</sup>の植林と高瀬川を開削した大梶七兵衛(1621-89)、高松で浜地区の植林を行った井上恵助(1721-94)がいます。いずれも業績を称える碑が建てられ、現在でも地域で顕彰されています。

## ④【斐伊川と関係深い地域】《大津・川跡・灘分・出西・阿宮》

大津、川跡、出西は斐伊川から用水を引き込む地域です。それぞれの取水口は大津が<sup>くりはらいわひ</sup>来原岩樋、川跡が<sup>たけしおおひ</sup>武志大樋、出西が出西岩樋です。これらから引き込まれた水は農業用水として広く利用され、水運も発展しました。

灘分や川跡の一部は江戸時代の初め頃に斐伊川が東流してからまちが発展しました。まちの歴史が斐伊川の流路に大きな影響を受けている点が特徴です。

阿宮では昭和30年(1955)頃まで斐伊川の砂鉄を採取して生計を立てている家が何軒かあったようです。

## ⑤【高瀬川・来原岩樋と大梶七兵衛】《今市・大津・古志・荒木》

高瀬川は、斐伊川から荒木へ至る農地へ用水を引くと同時に水路として利用するため、大梶七兵衛(1621-89)によって貞享4年(1687)に開削されました。高瀬川の始点となる大津は、高瀬屋(水運業)や紺屋などができて発展した町です。

今市では高瀬川と柳並木が独特の風情を醸し出し、その景観は地域の人々に親しまれています。

古志は大梶七兵衛朝泰の生地であり墓も現存することから、今でも盛んに顕彰されています。大梶七兵衛を称えるこの「古志夏まつり」は、古志にとどまらず周辺地域の人々にも親しまれています。

荒木は大梶七兵衛が開拓した土地であるため、地域では記念碑や大梶社も建てられその偉業が顕彰されています。

⑥【たたら製鉄】《多伎・窪田・須佐》

多伎、窪田、須佐はたたら製鉄関連の遺跡が多く残っています。多伎と窪田は江戸時代初期から明治23年(1890)まで操業していた田儀櫻井家のたたら製鉄関連遺跡が集中する地域です。大鍛冶場跡や山内従事者居住跡が残る宮本鍛冶山内遺跡、鉄製品の搬出や原料の搬入に利用された田儀港の近くに設置された越堂たたら跡などがあります。

また、須佐は旧飯石郡に属していたことから、雲南市を拠点とする田部家が経営していたたたら跡が残る地域です。田部家の操業は17世紀後半から大正4年(1915)で、菅谷たたら(雲南市)が有名ですが、出雲市内には郷城たたら跡や田代たたら跡が残っています。多伎、窪田、須佐は当時のたたら操業の全体像が概観できる地域です。

⑦【木綿栽培の盛行】《今市・平田・直江・大社》

貞享3年(1686)に松江藩は綿の課税を免除しました。このため18世紀に入ってから出雲平野で木綿栽培が本格的に行われ、明和・安永年間(1764-81)からは他国に移出されるようになりました。そのため今市、平田、直江、杵築は木綿の集積地となりました。

⑧【鉱山の歴史】《鰐淵・鶺鴒・窪田・多伎》

北山や中国山地には鉱山跡が残っています。北山山系では鶺鴒銅山、鶺鴒山、鰐淵鉱山が知られています。鶺鴒銅山は石見銀山より古い銅山で、大永6年(1526)頃に開発されたと言われています。鶺鴒山は明治元年(1868)に露頭が発見され、昭和45年(1970)の閉山まで約100年間開かれていました。鰐淵鉱山は松江藩が開坑したのが始まりとされ、昭和53年(1978)に閉山しました。これら北山山系の鉱山では、昭和30年代をピークに石膏の生産も行われました。

中国山地の鉱山としては、一窪田の銀山谷と佐津目の矢ノ原にあった銅山が知られており、いずれも大永年間(1521-27)に開発されたものと伝えられています。また、近年の調査により、昭和14年(1939)から昭和20年(1945)まで操業した、多伎地区の砂鉄鉱山である久村鉱山\*1の詳細が明らかになりつつあります。

⑨【信仰で発展した地域】《大社・東》

大社と東は、近世以降に出雲大社と一畑寺の参拝者で賑わい発展した地域です。近代以降は鉄道も整備されました。明治45年(1912)に国鉄の出雲今市―大社間が開通し、昭和5年(1930)に一畑電鉄(当時は一畑軽便鉄道)の川跡―大社神門間が開通すると、参拝者の数はさらに増大しました。

その後、平成2年(1990)に国鉄大社線は廃止となり一時参拝者数は減りましたが、出雲大社の「平成の大遷宮」を機に、神門通りは多くの人々で賑わいを取り戻しています。

また、大正4年(1915)には今市―一畑間で一畑電鉄が開通し、さらに、昭和36年(1961)から昭和54年(1979)まで一畑パークが開園したことにより、一畑寺の周辺も行楽地として大いに賑わいました。

⑩【壮大な二つの国引き神話】《大社・長浜・湖陵・多伎・日御碕・鶺鴒・鰐淵》

国引き神話の綱に例えられる菌の長浜は大社、長浜、湖陵、多伎に延びる砂浜で、長浜には八東水臣津野を主祭神とする長浜神社があります。これらの地域は国土創生の神話に深く関わる地域として注目されます。

また、スサノオがインドの壺鶺鴒山から流れてきた「浮浪山」を杵で築き固めたという中

世の「国引き神話」に基づく、日御碕、鵜鷺、鰐淵なども関連地域として取り上げることができます。

#### ⑪【内海水運で発展したまち】《平田・荘原》

平田は中世からの港湾都市であり、宍道湖、中海を通じて西日本海地域の水運に組み込まれていました。

江戸時代、松江藩は宍道湖と中海の沿岸である平田、荘原、宍道、松江、安来の5か所に「渡海場」として船座の特権を認め、「上銭」とよばれる輸送の許可料(手数料)を徴収しました。

明治期には宍道湖の北岸と南岸に汽船の定期航路が設けられ、北岸は平田、布崎、松江が、南岸は荘原、宍道、松江が航路によって結ばれていました。

#### ⑫【北前船が寄る港】《佐香・北浜・多伎・大社・日御碕・鵜鷺・鰐淵》

宇龍は中世から発展する港ですが、18世紀末になると、高瀬川によって運ばれた物資が荒木川方から集められたり、北前船の寄港地として利用されたりしてさらに繁栄しました。

また、風待ち港として多くの北前船が入港した鷺浦をはじめ、口田儀、十六島、小伊津なども港町として賑わったほか、猪目では北前船を利用した商いが活発に行われました。

#### ⑬【棚田が広がる景観】《稗原》

山間部には今でも棚田が残っており、平野の水田とは趣を異にする独特の景観が広がっています。特に稗原は、広範囲に多くの棚田が残っている地域として注目されます。

#### ⑭【近代化に貢献した人々】

島根県人初の内閣総理大臣である若槻禮次郎(1866-1949)や、東京都知事と司法大臣を務めた千家尊福(1845-1918)をはじめ、鵜峠銅山の開発を手掛けた勝部本右衛門(1823-81)、出雲製織株式会社を創立した宍道政一郎(1876-1938)、山陰鉄道出雲今市駅の開設に尽力した遠藤嘉右衛門(1881-1945)、大社宮島鉄道の発起人となった高橋隆一(1875-1943)らは出雲市の近代化に大きく貢献した人々です。

#### ※1 久村鉦山

島根県埋蔵文化財調査センターが平成28年度に行った発掘調査により、選鉦場をはじめ、それに関連する貯水槽、変電施設、ポンプ小屋などの各種施設の配置が明らかになりました。